

# 犯罪の分類

ゼロから司法試験 復習ノート / ゼロから刑法#9 / 動画: <https://youtu.be/6f47Pm2ybFs>

第2章 構成要件 ③／動画の内容を見返し用にまとめたものです（動画には含みません）。

第一関門「構成要件」は、いくつもの"ものさし"で犯罪を切り分けられます。分類は単なる暗記ではなく、**既遂の時期・公訴時効の起算・共犯の成否**といった結論を左右します。ここでは4つのものさし（+構成要件要素の種類）を押さえます。

## ① 結果の要否 — 結果犯と挙動犯 〔短答・論文共通〕

**結果犯**とは、一定の結果の発生を構成要件要素とする犯罪をいいます。殺人罪は「人の死亡」という結果を要します。刑法上の多くの犯罪はこの結果犯です。これに対し**挙動犯**（形式犯）とは、結果の発生を必要とせず、一定の身体的動作のみで成立する犯罪をいいます。住居侵入罪・不退去罪が例です。

結果犯の特殊な形態が**結果的加重犯**です。故意に基づく基本犯を行ったところ、行為者の予見を超える重い結果が生じた場合に、基本犯より重い刑を定める類型をいいます。傷害のつもりが死亡させた**傷害致死罪（205条）**が典型で、条文に「よって」の文言が用いられることが多いです（強盗致死罪240条など）。

## ② 法益侵害の要否 — 侵害犯と危険犯 〔短答・論文共通〕

**侵害犯**（実害犯）とは、保護法益を現実侵害したことが構成要件要素となる犯罪をいいます（殺人罪＝生命が現実侵害される）。これに対し**危険犯**とは、現実の侵害までは要らず、法益侵害の危険が生じれば足りる犯罪をいいます（放火罪・内乱罪77条）。

放火罪でいう「危険」とは、周りの建物や人に火が燃え移るおそれ、すなわち「**公共の危険**」です。この公共の危険を現実確かめるかどうかで、危険犯はさらに2つに分かれます。

- **具体的危険犯**＝危険が現実発生したことを構成要件要素とする。**110条（建造物等以外放火罪）**は「公共の危険」の発生が要求されており、これにあたる。
- **抽象的危険犯**＝危険が現実発生したことを要素としない。**108条（現住建造物等放火罪）**は「公共の危険」の発生を要求せず、焼損すれば成立する。これにあたる。

条文を並べると違いが一目で分かります。108条には「公共の危険」の文字がなく、110条には「よって公共の危険を生じさせた」と明記されています。

**【条文】刑法108条（現住建造物等放火罪）** 放火して、現に人が住居に使用し又は現に人がいる建造物、汽車、電車、艦船又は鉱坑を焼損した者は、死刑又は無期若しくは五年以上の拘禁刑に処する。

条文 刑法108条（現住建造物等放火罪）

放火して、現に人が住居に使用し又は現に人がいる建造物、汽車、電車、艦船又は鉱坑を焼損した者は、死刑又は無期若しくは五年以上の拘禁刑に処する。

【条文】 刑法110条1項（建造物等以外放火罪） 放火して、前二条に規定する物以外の物を焼損し、よって公共の危険を生じさ

せた者は、一年以上十年以下の拘禁刑に処する。

条文 刑法110条1項（建造物等以外放火罪）

放火して、前二条に規定する物以外の物を焼損し、よって公共の危険を生じさせた者は、一年以上十年以下の拘禁刑に処する。

なぜ逆になるのか——カギは「燃やす対象」の危なさです。人が住む家（108条）は、燃やせば当然みんなが危ない。だから法は危険の発生をいちいち確かめず、焼損した時点で成立とします（危険を擬制＝抽象的危険犯）。一方、自動車など建物以外（110条）は、燃

やしても周りに何もなければ危険は生じません。だから「公共の危険が現実に出たか」を要件とします（具体的危険犯）。たとえば山中にぽつんと置かれた車に放火しても、周囲に危険が及ばなければ110条は成立しないことがあります（器物損壊にとどまりうる）。

## 危険犯の分類 108 vs 110

比較項目	108条＝抽象的危険犯	110条＝具体的危険犯
対象	人が住む家	自動車・物など（建物以外）
「公共の危険」	立証は不要（擬制）	現実の発生が必要
成立する時点	焼損すれば成立	公共の危険が出て成立
具体例	住宅街の住宅	屋外の自動車

図：抽象的危険犯（108条）と具体的危険犯（110条）の対比表（板書）。

〔超頻出〕108＝抽象（焼損で成立）／  
110＝具体（公共の危険が必要）。対象の  
危なさが違うから要件も逆になる、と理解  
すれば逆に覚えません。

### ③ 既遂後の法益侵害 — 即成犯・状 態犯・継続犯 〔短答・論文共通〕

このものさしの軸は「既遂のあと、犯罪行為  
そのものが続いているか」です。

- **即成犯**：既遂と同時に法益侵害が完成し、終了する犯罪（殺人罪）。人が死ねば侵害はそこで完成し、続きようがない。
- **状態犯**：既遂後も法益侵害"状態"は残るが、行為自体は終わっている犯罪（窃盗罪）。残る状態は新たな犯罪を構成しない——盗んだ物を持ち続けても新たな窃盗にはならない（不可罰的事後行為）。
- **継続犯**：既遂後も実行行為と法益侵害が継続する犯罪（監禁罪）。閉じ込めている間、ずっと監禁罪を実行し続けている。

## 既遂のあと、どうなる？ 即成・状態・継続

比較項目	即成犯	状態犯	継続犯
例	殺人	窃盗	監禁
既遂のあと	その場で終了	状態は残る（行為は終了）	行為も侵害も継続
ポイント	侵害は完成し終了	残る状態は新たな罪でない	時効は終了時・既遂後も共犯

図：即成犯・状態犯・継続犯の対比表（板書）。

【条文】 刑法220条（逮捕及び監禁罪） 不法に人を逮捕し、又は監禁した者は、三月

以上七年以下の拘禁刑に処する。

条文 刑法220条（逮捕及び監禁罪）

不法に人を逮捕し、又は監禁した者は、三月以上七年以下の拘禁刑に処する。

継続犯には短答頻出の効果があります。①犯罪行為が終了するまで公訴時効は始まりません。②既遂のあとでも、途中から加わった者に共犯が成立しうる。冒頭の「監禁から10年でも時効未開始」は、まさにこの①の帰結です。行為が続いているかどうか、時効や共犯の成否を分けます。

### ④ 主観 — 故意犯と過失犯〔短答・論文共通〕

故意犯は故意を構成要件要素とする犯罪で、これが原則です。過失犯は過失で足りる犯罪ですが、過失致死罪など一定の重大犯罪に限

って処罰される**例外**です。「うっかり」は原則として不可罰、と押さえます。

## ⑤ 構成要件"要素"の種類 — 記述的 と規範的 [短答・論文共通]

犯罪そのものだけでなく、構成要件の"要素"にも種類があります。

- 記述的構成要件要素：見ればわかるもの（例：「人」「物」「殺す」）。
- 規範的構成要件要素：価値判断が必要なもの（例：「わいせつ」175条・「公然」）。意味内容が社会の常識・価値観で変わりうるため、裁判官の規範的・評価的な価値判断が入る。

規範的要素について「どの程度の認識があれば故意があるといえるか（意味の認識・素人的認識）」は、**構成要件の故意の回**（#16）で扱います。

### 短答ひっかけ

- 108＝抽象的危険犯（焼損で成立）／110＝具体的危険犯（公共の危険が必要）。対象の危なさが違うから要件が逆になる、と理解して逆に覚えな
- 「危険犯」と「結果犯／拳動犯」は別のものさし。放火（108条）は危険犯だが、焼損という"結果"は必要——すなわち**危険犯かつ結果犯**。
- 継続犯（監禁罪）は公訴時効が"**終了時**"から起算される（既遂で終わる即成犯と混同

しない）。途中から加わった者に共犯も成立しうる。

- 結果的加重犯＝故意の基本犯＋予見を超える重い結果（傷害致死205条・強盗致死240条）。条文の「よって」が目印。
- 故意犯が**原則**、過失犯は明文のある**例外**だけ処罰（「うっかり」は原則不可罰）。

## 今日の地図（保存版）

- 構成要件は5つの"ものさし"で切り分ける（分類は既遂時期・時効・共犯の結論を左右する）
- ①結果の要否＝**結果犯**／**拳動犯**（特殊形態＝結果的加重犯205条）
- ②法益侵害の要否＝**侵害犯**／**危険犯**（危険犯＝抽象的108条・具体的110条）
- ③既遂後に行為が続くか＝**即成犯**・**状態犯**・**継続犯**（継続犯220条＝時効未開始・途中共犯）
- ④主観＝**故意犯**（原則）／**過失犯**（例外）
- ⑤要素の種類＝**記述的要素**／**規範的要素**
- 送り：規範的要素の認識（意味の認識）→ #16／放火罪の詳細 → 各論／未遂・予備 → #29

次回は第2章④「実行行為——『現実的危険性』とは」。構成要件の客観的要素の1つ目として、処罰してよい行為の入口を画する「現実的危険性」を扱います。